
思い出の場所

福寺なつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出の場所

【Nコード】

N8601F

【作者名】

福寺なつ

【あらすじ】

幻想水滸伝2主人公視点小説です。これはサイト「花住時」にて載せていた二次創作小説です。

> 思い出の場所<

トランの英雄と呼ばれた人に会うことは容易くない。

それでも私は暇を作っては会いに行く。

何か用事があるわけでもなく、たとえ面会が叶ったとしても歓迎はされない。

「ようこそ、戦士の休息だね」

出迎える態度は拒絶ではない。受け入れてくれる。

しかし、彼の横顔を見ると物悲しくなるのだ。

私は彼にとって招かれざる客なのだから。

渡し舟に乗りバナアの村で買い物を買わせると、所持金が尽きた。未練がましく手のひらの小銭を眺めていると、

「行くよ、たいこうぼう、グレッグミンスターまでは遠いんだから」と、ルックに急かされた。店の外ではフリックがぼやいている。

「まったくビッキーも、瞬きの手鏡で国境ぐらい越えて飛ばしてくれりゃーなあ」

「フリックだけ飛ばしてもらいなよ。・・・3年後のグレッグミンスターかもしれないけど」

ありえるー、と歓声がわきあがる。しれっとして言うルックのつこみは怖い。今のは笑えるけど。

村を出ようとした時、ビクトールがフリックに囁くのが聞こえた。「どーせなら、オデッサが死ぬ前に飛ばしてくれとか、馬鹿なこと考えてないだろうな」

「・・・考えた。・・・けど、あいつはそんなこと望んじやない」

2人のやり取りはそこで終わり、僕たちはぐねぐねと曲がりくねった山道を突き進んだ。

ここはモンスターとの遭遇率が高く、何回来てもうんざりする。戦っている間は無我夢中だ。

でも、こくてんこ城に人が集まってから、自分が生き残るために戦うだけではなくなった。

・・死なないための戦い方をするようになった。

「きみが死んだら、この戦いは終わりなんだ！」

ルックがフリックがビクトールが・・懸命に回復アイテムや魔法を寄こす。

その度に、僕の命は重くなった。

グレッグ・ミンスター 国境地帯の門が見えてきた。

「パーティーの顔色が変わる。」

僕はここに来るとき、かつてこの地を目指して戦った者たちを主に選んでいる。

初めは単純に喜ぶだろうと思ってしたことだった。

僕のあさはかな思い込みはすぐ打ち砕かれた。

そのうえで、僕はまた同じようなメンバーを選び出してしまふ。

意地、なのかもしれない。僕は彼に見せ付けてやりたいのだろうか。

やがて、太公望・マクドゥール家の前にたどり着いた。

思い出すのはテッドの事。

死に際に聞いた言葉、彼の声、彼の表情、この手で覚えている最後の体温。

その時の自分はどんな顔をしていたのだろう。

もう分らない事。

「坊ちゃん、お客様ですよ」

グレミオさんの声がお屋敷中に響いてすぐ、いつもと変わらない

姿でトランの英雄は2階から降りてきた。

「よう、太公望。」

まずはビクトールが片手を挙げる。

「久しぶりだな、太公望」

フリックの挨拶。

「お久しぶりです、太公望さん」

僕もできるだけ緊張が声に出ないよう声を出す。

「みんな、ようこそ。交易で儲けに来たのかい？」

太公望さんにはにっこりと笑うと親指とひとさし指をくっつけて見せた。

「君も本当に相変わらずだねえ」

ルックが呆れた声でため息をつく。

カスミとナナミは黙っている。気のせいか二人ともここに来る時は口数が少ない。

カスミは太公望さんと面識があるはずだし、ナナミはいつだって元気なのに、何故だろう。

今回ここに来た目的は2つ。

1つは太公望さんの指摘どおり交易の仕事をこなすため。(財政をやりくりするためでもある)

もう1つは太公望さんを闘いに誘うためだった。

今のメンバーは6人なので、彼を誘うとひとり本拠地に帰さなくてはならない。

戦力的にはみんな同じくらいなので、誰でもいいのだが、なんとなくナナミを指名してしまう。

「じゃあね」

と、去っていくナナミの後、太公望さんが加わって、僕は宿屋に駆け込んだ。

前回の戦闘の名残で、太公望さんの体力が激しく低下したままだったのだ。

「そんなに急がなくても宿屋は逃げないよ」

泊まることになった部屋で、太公望さんはまたにつこり笑った。

「どうせ僕たちも戦い続きでそろそろ泊まる頃でしたから」 僕もにつこり微笑み返す。

かつてグレッグミンスターを目指して戦っていた間、自分は目の前にいる少年のように笑ったことがあっただろうか。太公望は思っもつと必死で、それどころではなかった気がするけど、それは嘘で笑顔を完全に手放したわけではなかったはずだ。

闘いの中にも喜びも悲しみも、当然あった。

心の中にあるもの、忘れたもの、忘れてたくないもの、忘れてしまいたいのに出来ないもの。

テッドや、一度体験したグレミオの死、父との別れ、多くの人の記憶が駆け巡る。

綺麗に分類はできないまま、別の闘いに関わっていくのか。紋章と、共に。

「ねえ、君は」

太公望さんがなにか言いかけたとき、ノックがした。

ノックの主はカスミだった。

「太公望さま、大丈夫ですか？」

心配そうなカスミに、太公望さんは「平気」と穏やかな笑みで返す。

「ところで、他に用があるんじゃないの？」

太公望さんの問いかけに、カスミは暗い表情で頷いた。

「ちょっと、この酔っ払いなんとかしてよ」

ルックが心底ウンザリしている。無理も無い。酔っ払ったフリックとビクトールに絡まれているのだ。

「脱出が遅かったんじゃないの」

太公望さんの批評にルックが叫び返す。

「なんでもいいから、代わってくれ！」

いやだ・・・僕と太公望さんとカスミが同時に後ずさる。

だって、陽気なビクトールはともかく、フリックが・・・

「なんだよ、ルック。俺のついだ酒が飲めねえのか？・・・俺が不幸の塊だからか？！」

駄目だ、完全に酒に飲まれている。

「バケツだ、バケツに水くんできて！」

ルックが、フリックにわはははと髪の毛をぐしゃぐしゃにされながら叫ぶ。

「なにか、嫌なことでもあったんでしょか。今日はビクトールさんよりハイペースで

お酒をぐいぐい飲みだしたんですよ」

カスミが不安そうにバケツを持ってくる。

「僕としては、風船があればと思うんだけど・・・
ばしゃあ。」

太公望さんが勢いよく、フリックに水をかけた。

「冷てー！！！」

フリックとルックとビクトールの三重奏が、宿屋に響き渡る。

カスミがこっそり手をあわせていた（合掌？）

太公望さんは、一滴も水をかぶっていなかった。当然のように。

「いやあ、楽しいコントだったね」

太公望さんとカスミと僕は、びしょぬれ3人組を放ったまま、2階に上がった。

「コントって、太公望さん」

「珍しいよ、ルックが捕まったまま、絡まれるなんて」

「・・・私もびっくりです。あつというまにフリックさんが出来上がってしまったって、もう延々と3年前の話をしだして、急に私やルック

さんに絡み出したんですよ。」

カスミがふうつとため息をつく。

「ちゃっかり逃げ出したところは、さすが忍者というか。」

「でも、なんであんな酔っ払ったんだろう。」

僕の疑問に、太公望さんとカスミは目を合わせ、同時に口を開いた。

「それは・・・」

「やはり、ここがグレッグミンスターだから・・・」

太公望さんとカスミは、しょうがないねと続けた。

「ああ」

ため息がもれた。ここに来るまえの、ビクトールとフリックの会話。

額面通りに受け取っちゃいけなかったんだ。

されるがままに受け止めていた皆。それに引き換え僕は・・・。

「気づかないのが、君の役割さ」

太公望さんの慰めが、僕の耳を素通りしていく。

「君はオデッサを知らない。それは、カスミもルックもだけど」

「知らないからって、・・・知ってたら僕は」

ここには連れて来なかった。

「フリックさんは、そんな弱い人じゃありませんよ」

カスミが「立ち話もなんですから、どうぞ」と僕たちを、自室へ招き入れた。

ここの宿屋では2人1部屋だが、今回カスミが1部屋、僕と太公望さんが1部屋、残り3人が1部屋を借りている。

この部屋割りには多くの苦情が出た。

ビクトールの寝息がウルサイ。

どうして僕が3人部屋なんだ！

こっちこそ願い下げだ！

いやなら、ミルイヒの屋敷に留めてもらう？

太公望さんの提案に、みんな大人しく引き下がる。

ミルイヒ將軍ってここから北西のお屋敷の持ち主で、僕は中に入ったことはないんだけど、なんだかヴァンサンやシモーヌに通じるセンスがびしびし伝わってくるんだ。

こういわれると、引き下がったほうが得策だったのも頷ける。

やっぱり、太公望さんって、しっかりしてるよなあ。

部屋に入ってきたよるきよるして僕に、2人がうるんな視線を送ってきた。

「な、なんでもないですよ」

思い過ぎしか。僕は探していたものが見つからず、ほっと胸を撫で下ろした。

気にしすぎ、かな。いや、でも、万が一、そう念には念をいれとかなくつちゃ。

「はいはい、とりあえず、座って」

太公望さんが僕の手を引いて、椅子に座らせる。

カスミはくすくす笑っていたが、やがて、視線を窓の外に向けた。真っ暗なガラス窓は、室内を反射している。

彼女は何を見ているのだろう。

窓の外に広がるグレッグミンスターの町並みだろうか、それとも・

ガラスに映る太公望さんの横顔・・・？

フリックが陽気に酔っ払って、一番被害を受けた人が、怒鳴り込んできた。

「よくも、僕めがけて水をかけたね」

まだ、毛先が濡れた状態で、ルックが太公望さんに責め寄る。

「ここはカスミの部屋だよ、ノックもなしに入ってくるなんて、失礼だなあ」

太公望さんは落ち着き払って、事態についていけないカスミに目配せする。

あのバケツの水、フリックに掛けたのに、ルックってば勘違いしてる……。

「そうだよ、ルック。太公望さんに言いがかりをつけるのは筋違いだ！」

僕は遅ればせながら、ルックと太公望さんの間に割って入った。

この、ふしあなのめは~~~~

ルックの口がぱくぱくと素早く動く。

節穴？

「どーゆーこ……」

「カスミ！話しは終わった？この人、借りてくよ」

ルックが僕の抗議をさえぎって、袖を引っ張る。

「離してよ、まだ、なんにも」

「いいですよ」

カスミは、夜も遅いですしね、と僕を風の使い手に引き渡そうとする。

そんな。そもそもフリックが酔っ払った理由聞いてないよ。こういうことは聞いておかないと寝付けない。

「ま、時には感傷的になるってことだと思えますよ」

「そうそう、相手が事情を知ってる奴ばかりで、気が緩んでるんだよ」

「国境越えたぐらいで、勝手に甘えないでほしいよ、ろくな目にあいやしない」

なんだ？カスミも太公望さんもルックも事情を分かっているってこと？

僕だけピンとこないんだけど、場所とメンバーによっては酔っ払

いたくなるの？

相手がビクトールだけならまだしも、ルックでもオーケーってことは、メチャメチャ切羽詰っているんじゃないよ……。

「とにかく、フリックのことは問題ないって」

ルックがきつぱりと断定して、僕の耳元でそつと囁く。

「そんなことより、物は相談なんだけど」

太公望さんが自室に戻ったのを確認してから、ルックはこつち、こつちと、廊下の隅から手招きする。

なに、こそこそしてるんだろっ？

フリックのせいで、一人だけ事情が分からず疎外感を植え込まれたうえに、ややこしいことは勘弁してほしい。

「なに？また、装備がボロイとかいいう文句？」

「も……つと、重要な話だよ」

ルックがかすれきつた声でそつと耳打ちした。

「泊まる部屋、交代しない？」

僕と太公望さんが同室で、ルックがビクトールとフリックと相部屋。

ここで、僕とルックが部屋を交代するということは、

「ルックが、太公望さんと相部屋するの？」

僕がそう言った時の、ルックの表情は僕を、いや世界をたじろかせるのに十分だった。

例えるならば、天国で地獄の大魔王に舌を抜かれたみたいなの、信じられないって顔だった。

時が止まったかのような、錯覚のあと、

「……そうじゃないよ」

と、疲れきつた声で肩を落としながら、ルックはゆっくりと大きく手を左右に振って、否定した。

「君と僕が2人部屋、トランの英雄さまには、3人部屋へ移つてもらう、分かる？」

ルックがてきぱきと、僕、自分、太公望さんの入つて行つた部屋を、順番に指差していく。

「ええつ、太公望さんに3人部屋なんて、出来ないよ！」

ただでさえ、無理して鬨いに協力してもらっているのに。それに彼は僕みたいな庶民と違って名門のご子息様だ。

「この脳みそは、前回された、情けない悪戯をもう忘れたのかなあ？」

ルックは口元を引きつらせながら、僕の口の端を引っ張った。

「わはへふよ、ははらひほふへて・・・」

「何いってんの」

僕はルックの手を振り払った。

「覚えてるし、気をつけてるって、言ったの！」

ルックは腕組みをして、疑わしそうな視線を送ってきた。信じてないな・・・。

何か言い返そうとすると、ルックが意味ありげな表情でこう提案した。

「まあ、要は太公望と同室でなきゃ、過ちは繰り返されないんじゃないかな？」

なるほど。そうだ、そうなんだ。ああ、僕は再び同じ間違いを繰り返すところだった。

僕はようやくルックの意図を理解した。

長い夜だ。今頃ぐっすりと眠って、明日バナーへ帰るための体力を確保しているはずだったのに。

目の前で、太公望さんがいつも通りにこやかに微笑んでいる。

横では、ルックもにっこりと穏やかに笑っている。

怖い。部屋の空気が凍りつきそうだ。

僕は、まだ眠れそうにない。

それは、太公望さんの声だった。

僕の指の間から水が、さらさらと零れ落ちていく。

「なにか、こっちを向けないことがあったの？」

太公望さんがかつかつかと僕の背後にやって来る。

「顔を上げて？」

誘われるように囁かれても、僕には応えることができない。

「・・・脇をくすぐるよ」

それが最後通告だった。

脇をくすぐられ、手のひらに溜めた水が、排水溝に流れ切れず、洗面台の淵に跳ね上がる。

「さあ・・・」

背後から伸ばされた手が、僕の顎を持ち上げる。

・・・もうお仕舞いだ。

僕は目を閉じた。

鳥の声だけが聞こえる。

僕はそうつと、鏡越しに太公望さんの目を見た。

彼の瞳は大きく見開かれていた。

無理もない。

僕の眉毛は、マジックペンで1本に繋がっていたのだから。

「ちょっと、たいこうぼう、やめなつて、赤くなつてるよ！」

「いいんです、それより、まだ消えない！」

「かなり消えたよ、それ以上こすると肌が荒れる！」

「だって、このままじゃ、恥ずかしくて、外に出られません！」

「・・・恥ずかしいのは、こっちのほうだぜ？」

ビクトールの呆れた問いかけに、いつの間にか集まっていた野次馬が一斉に頷いた。

「いいいい、いつからそこに！」

動揺で顔が赤くなるのが分かる。

「いつつて、そりゃあ、お二人さんが”水もしたたるいい男”になる少し前、かな」

「長いじゃないかつ」

「昨日の因果応報だ」

フリックがぼそつと皮肉を言う。それは『自業自得』だろう。

「ルックは?!」

僕の叫びに答えはない。こいつら・・・。

怒りがあつと体の中を駆け上がっていく。冷や水を浴びせかけたのは、ビクトールの忠告だ。

「いま会うのは止めたほうがいいぜ。・・・まだ、うつすら残っているから・・・インク」

僕は再び眉間を集中的に洗う。

ルックが現れたのは、僕の眉間が少しひりひりした頃だ。

とつくに野次馬は消え、しつこく顔を洗い続ける僕に呆れ、ビクトールもフリックも、太公望さんも食事のため1階に下りていた。

「少しは反省したかな？」

腕組みをして静かに問いかけてくるルックを、僕は濡れた前髪の間から見詰め返す。

自然と唇が真一文字に引き締まる。

ルックのさらさらセミロングを、ずぶ濡れにしてやりたくなった。「悪戯するなんて、話しが違う！」

落ち着いて話さなければ。そもそも、どこから沸いて出てきたマジックインク!

「話し？それはこっちが聞きたいくらいだ。どういつつもりでここにきてんの、君」

「謝りもしないで、なにが言いたいんだっ」

「君は一度、故郷へ帰っているはずだが」

「・・・それが」

ナナミとジョウイと帰った街。・・・反逆者として。

「土地の持つ記憶を信じるかい？」

あやまらないよ、と捨て台詞を残してルックは踵を返す。

「・・・ルックはここに来たくないってことなのか?!」

ひらひらと手を振る背中。それは、ルックにとっての否定に見えた。

では、太公望さんにとっては？フリックはビクトールはカスミは・・・。

深い記憶を抱く場所。

僕はある日、ジョウイと共に飛び降りた崖を思い出す。2人でつけた傷と、川の中に飲み込まれていく記憶、それから・・・ぐるぐると蘇る過去に目を閉じる。

一滴の水が、ゆつくりと床にしみ込んでいった。

僕はゆつくりと、前回グレッグミンスターにやって来た時のことを思い出した。

メンバーは奇しくも今回と同じで、そういえば妙にビクトールとフリックは酒量が多くて、カスミとナナミは無口で、ルックはいつもどおりだったな。太公望さんは・・・。

構わないよ、と快く戦力になることを承知してくれて、そのくせ、しょうがないな、という表情だった。

初めはもう戦いに関わりたくないからだと思っていた。

それだけではないとしたら？

かつて共に戦った者達を見て、彼は単純に懐かしいと思ったのだろうか。

紋章を持つものとして。

3年。紋章と共にある時間。僕には分からない。・・・まだ。

カスミの顔が浮かぶ。太公望さんを、好きな、彼女。

ナナミの顔が浮かぶ。大切なきょうだい。太公望さんに会うのが辛いのだとしたら、それは将来の弟の姿に見えるから？

年をとらない外見。

記憶の中の土地は在りし日のままだ。でも町は、人は時間の分だけ記憶を重ねる。

僕のここに来る時の人選は、太公望さんにとって残酷なのだろうか。

そう思うのが悲しい。

僕は自分の手の平を見つめた。

「ちゃんとインクの跡、消えてるね」

食事から戻ってきた太公望さんが、ほらと軽食を差し出す。

「ありがとうございます」

「泣いたね？」

太公望さんがうつむきつ放しの僕の顔を覗き込んでくる。

「これはっ、顔の洗いすぎですっ」

顔が赤いのも心がぐらぐらしているのも、みんなルックのせいだ。ひとの眉間に線を引いて遊ぶぐらいなら。

つないでほしい。

眉毛と眉毛じゃなくて、紋章を持つもの同士としての何かを。

「僕は紋章を持っていることの辛さは、まだわかりません」

突然の僕の独白に、太公望さんは小さく、そう、と呟く。

「僕に分かるのは、ただ戦わなくてはいけない、それだけです」
この国のためでも、自分のためでもある。

同士がいて仲間が増えて。戦いが戦いを推し進めていく。

「本当は誰かを仲間にすることは怖い……」

仲間を僕はいつか殺してしまうかもしれないのだ。作戦のなかで戦場で。

「リーダーとして、何を言っているんだ？」

顔を上げると、太公望さんは叩きつけるような勢いで、僕の額に・

・

太公望さんは叩きつけるような勢いで僕の額に、でこピンをした。

「いたっ」

わざと、狙ってだろう。洗いすぎでひりひりしていた眉間に響くでこピンだ。

「苦悩しないで、僕の目を見る！」

太公望さんが僕のほっぺたを、両手でむぎゅっとはさむ。

「非道ですよ、太公望さん！そもそも前回宿屋であんなことがあったから、昨日僕はルックと同じ部屋にしたのに！」

「あっさり裏切られたね」

嬉しそうに言うなあ、この人も。

すうつと、太公望さんの目が細められる。真剣な。

「……君に迷いがあるのは分かるよ。僕だってそれに他の人だって、心の中に色んな分岐点を抱えていると思う」

あの日に戻り行く心。もう1つの道を選ぶ自分の姿は、消えない。それでも、時は人の背を押していく。

「僕は君がここに来て、仲間にさそったら、共に行く」

呪文のようにゆっくりと、太公望さんは囁く。

「……力を貸してください」

魅入られたようにゆっくりと、僕も答えを出す。

「にらめっこは、終わったか？」

いつか見た光景だ。

廊下には野次馬と呆れ顔のビクトールとなぜか硬直したフリックと鉄仮面のルックだ。

カスミがいなくてほっとしたのは何故だろう、と我に返ると。

「うわああ」

目の前に太公望さんの顔がドアップだ！

「そろそろ出発したいんだが、カスミも呼んでいいか？」

ビクトールにこくこく頷いて、「そんなに近寄って見なくても、とっくにインク消えてるけど・・・」

と冷静なルックにもこくこく頷く。

「・・・・・・一瞬俺の脳で処理しきれないシーンかと思ったんだけど・・・」

酔っ払いのようなたわ言をもらすフリックのことは放っておく。

でこピンの跡を見ていたらしい太公望さんがフリックに視線をやった後、ルックに何か囁いて部屋を出て行く。

やがて、受付のまえで集合して、僕たちは出発した。

グレッグギンスターの国境を守る扉が閉まる音を、背後に聞く。ビクトールもフリックもカスミもびしびしとモンスターを倒していく。ルックはやる気なさげに強力な魔法を平然と繰り返す。

仲間の待つ城に帰るのだ。

そこは、それぞれの人が己の分岐点を経て、選んだ場所。

出会いは偶然から、必然まで。自ら集ったもの、求められて集まったもの。

108つの星。

その中の1つ、1つが、今は目的を同じくしている。

自分ひとりでしか歩けない道のりの途中で出会った人たち。

僕は見るのだろうか。

全てが終わったなら、それぞれの前に現れる可能性という名の分岐点を。

108つの可能性を。

> 思い出の場所ー終わり<

草原

ここは誰のものでもない土地だ。

僕の命も誰のものでもない、語りかけてくる。
だから死ぬんじゃないよ。

草原は焼き払われ、大地が姿をあらわにする。

僕の手に住った紋章。

去っていった友人、彼の笑顔をもう思い出せない。

季節は巡り、春が来る。

夏には草は生い茂り、何事もなかったように僕の前に現れる。
僕だけが変わってしまったのだろうか。

秋が来て、冬が来て、

戦って戦って戦って、
何が残るのか分からなくて。

くじけそうになって、僕は草原の中に立つ。

一人だ。

平らかな地平の上で、僕は生きている。

> 終わり <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8601f/>

思い出の場所

2010年10月8日15時19分発行